

# 職業経歴からみる転職経験の意味

## ——転職者内の多様性を加味した縦断的分析——

東京大学大学院・日本学術振興会 麦山 亮太

### 1 目的と問題背景

本研究は、転職を経験することが職業経歴をいかに変化させるのかを、転職の文脈および転職者の属性を考慮しながら検討する。これを通じて、長期雇用慣行を維持する日本の労働市場が階層生成過程をいかに制約しているのかを明らかにすることが本研究の目的である。なお本研究において転職とは企業間の移動を意味する。

日本の労働市場は新規学卒者の長期雇用を前提とする内部労働市場を通じたキャリア形成をその特徴とし、転職に代表される外部労働市場を通じたキャリア形成の機会は乏しいとされてきた。こうした労働市場の構造はキャリアを通じた階層生成過程に対していかなる帰結をもたらしているのだろうか？これを明らかにするためには、転職経験者の長期的な職業経歴を分析する必要がある。しかし、転職の結果職業経歴がいかに変化するのか、またいかなる転職者がより不利なキャリアを歩むこととなるのかについては未だ十分に明らかでない。そこで本研究では、被雇用者の職業経歴を対象として、転職経験がその後のキャリアにもたらす影響をその文脈と転職者の属性を考慮しながら分析する。

### 2 方法

分析には 2005、2015 年 SSM 調査の職業経歴情報より作成した 1986–2015 年の被雇用者からなるパーソン・イヤータを使用する。職業（7 カテゴリ）と雇用形態（2 カテゴリ）を従属変数とする固定効果モデルにより、転職経験の効果を測定する。さらに転職入職年・前職離職理由・転職経験回数・就業中断期間の有無といった転職の文脈のほか、転職時の年齢等の個人属性と転職経験との交互作用を取って、いかなる転職がその後のキャリアをより有利／不利にするのかを検討する。

### 3 結果と考察

転職経験者は初職継続者と比較して低い職業的地位・非正規雇用に就いている者が多い。固定効果モデルを用いた分析からは転職経験の効果のうちかなりの部分がセレクションにより生じていることが確認される。しかしそれでもなお転職経験がその後より高い職業的地位・正規雇用に就く確率を低める効果を有する。

ただしその効果は転職の文脈によって大きく異なる。とりわけ年齢による違いは顕著であり、職業的地位獲得に関しては、高い年齢で転職するほど管理職の地位を得る確率は顕著に低下し、他方で非熟練マニュアル職に就く確率が上昇する。正規雇用獲得に関しても、高い年齢での転職の場合、正規雇用を得る確率が低下する。さらに、「よい仕事が見つかったから」という理由による転職（男性で転職全体の 45%程度、女性で 25%程度）は、それ以外の理由による転職と比べるとその後正規雇用などのより良い地位を得る契機となっている。同じ転職といっても内部にはその意味が大きく異なる転職が含まれ、転職とキャリアの関係を議論するためにはこの点の考慮が欠かせない。

以上の分析結果は、日本の労働市場が標準的なタイミングから外れたり、次の仕事を見つけない状態で転職を余儀なくされた者をより周辺的な地位へと移動させることによって、階層生成に寄与していることを示唆している。労働市場構造と階層生成過程の関係を捉えるにあたり、職業経歴に着目した縦断的な分析は重要なアプローチといえる。

謝辞 本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業（課題番号 JP25000001）に伴う成果の一つであり、SSM 調査データの使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た。